

朝に寝て、昼に起きる

僕が昼夜逆転した理由

不登校経験者コラム

僕は、小学生と中学生のころに数回、不登校になったことがある。

一番不登校が長かったのは、体罰が原因で行けなくなった、中学2年生のとき。当時の僕は絶賛、昼夜逆転生活を送っていた。

学校へ行かず、夜中はアニメを観終わったら、朝の5時に寝て、昼すぎに起きる日々。まわりの人から見たら、心配になる生活リズムだったと思う。でも、僕にとって昼夜逆転は必要なものだった。

みんなが学校へ行っている時間、本来なら自分が学校へ行かなければいけない時間に起きていたというよりは、なかなかつらい。自分が

学校へ行っていない自覚がむくむく膨れあがってくるし、朝から昼にかけては今から行けばまだ2限目に間に合う」という気持ちと「やっぱり行きたくない」という気持ちのあいだで何度

も揺れ動く。そんな時間がつらすぎて、おのずと僕は朝を避けるようになった。反対に夜は居心地がよかった。みんなが寝静まっていた時間に好きなことをするのはストレス発散になったし、何より自分自身を静かに見つめる時間にもなった。昼夜逆転という生活

活がなければ、僕の心は窮屈で、もっと追い詰められていたと思う。きつと、当時の僕にとって、昼夜逆転は「生きやすさ」につながっていたはずだ。
(スライム・20代)

2023年7月15日
不登校新聞

より

お元気ですか。
夏休みに入りほとほとしていることでしょう。それにしても毎日暑くて大変です。私は暑さに負けています...

「政治の力」によって社会は良い方向に変えられるという感覚を...もう一度身につけたい。
三浦まのり

鷺田 清一 2760

折々ことば

バブル崩壊後30年の間に失われたのは、経済成長である以上に、人びとのこうした感覚であったと、政治学者は言う。問題は、差別を解消し、不正をきちんと正してゆく「政治の力」が弱まったことにあると。それはとりもなおさず私たち市民の力の衰弱でもある。連載論考「『変わる』を愛する」(第1回、「世界」6月号)から。

2023・6・13

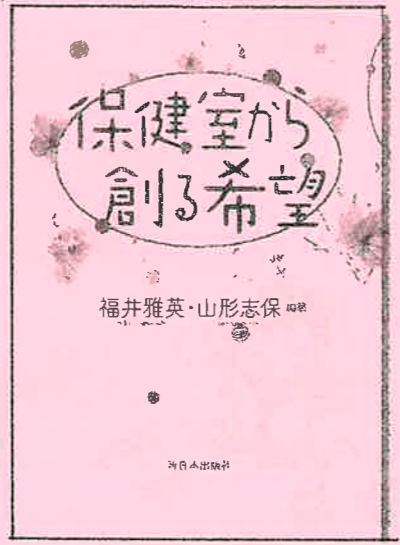
編集後記

ある講演会で、発達心理学者の浜田寿美男さんが語った「人は、明日身につくかもしれない力を使って、今を生きることができません」という言葉が長年、私の心に残っています。早期教育をはじめ、「将来必要となる力をどう身につけさせるか」ということが注目されて久しいですが、浜田さんは「手持ちの力を使って今を生きるということが見失われている」と警鐘を鳴らします。不登校において、将来は子どもも親も気になることですし、先々のことを見越して考えることはとても大切なこと。ただし、その将来は今と地続きにあるものでもありません。私が取材してきた不登校経験者の多くが「今やりたいことを大切にしたい」と語っています。あらためて、子どもを今を大事にすることの意味を考える日々です。
(小態広宣)

8月8日(火) 9日(水) 10日(木)
東北民教研へどうぞ! 浅虫さくら観光ホテルにて
夏休み前にちらしが入っていると思います。

田舎に住んで良かったと思っていること、それは日中とにかく暑くても夕方になると涼しい風が吹いてくるということ。周りに田んぼや畑や土や木々があるおかげです。アスファルトやコンクリートに囲まれていると、心地よい風はなかなか吹いてきません。夕方、青森の新町通りを歩くといいです。
文責 阿部陽子 スマイルサポート(017-722-3749)

実は私はこの本を読んでいません。新聞に載っていて、良さそうだなと思い記事にしました。読んで感想を聞かせてくれたらうれしいです。
養護教諭の山形さんと
大学で長年教師養成を担当した福井さんによる
「教育物語」!



《主な目次》
はじめに—子どもがいのちに見える学校づくり

- 第1章 子どもたちの生きる世界に向きあう保健室
- 第2章 養護教諭って、なんだらう?!
- 第3章 「子どもの貧困」と「社会」という角度
- 第4章 子どもと保健室をめぐる対話

◎定価: 本体1600円+税/四六判/ISBN978-4-406-06758-4



「本当は私だって
弟や妹のように、
ワガママも言いたかった」

やっとそう言えるようになった
二十代前半の結末だった。

若い娘の葬儀とは思えない
多数の会葬者があった。

誰かのために
骨身をけずって
惜しまない癖を
止められずに折れた。

私たちの周囲にも、
よい子はたくさんいる。

その子達が
よい子であるが故に、
抱えた諦めや絶望を
見落としてしまう。

だからと云うので、
「子どものサインを見逃すな！」
などと、使い古しの言葉を
叫ぶ人がいる。

よくそんな
電柱の標語のようなことを
言っていて平気だなど思う。

慌ただしく暮らす大人に
子どもの胸の内など
ほとんど見えない。



子どもも
言っても無駄だと
思っているから黙っている。

こう考えたら少しは
分かりやすいだろう。

「なんとかしてくれ！」
と叫んでいる子は
まだ大丈夫なのだ。

なんだかんだ言いながらも
その声に応えて
くれるかもしれないと、
家族や世の中を信じられている。

言っても仕方がないと
諦めている子が
なにも話さない。

こんな子に「他者」と
「言葉」への期待を
回復させるのは、
簡単なことではない。

それは親の仕事だし、
大人の仕事だと思っ。



完